

## 絵笛愛心講 — 浦河農協のはじまり

浦河だけではないが、北海道へ入植した百姓は、多かれ少なかれ高利貸や、一種の仕込（しこみ）屋の世話にならなかった者はなかった。これらの店から、春から秋までの食い扶持はどうしても借り入れなければならないし、着業資金の貸し付けもしてくれる。しかし定価の二割増しという品物を買わねばならず、半月後からは月二分（二%）の利息がついた。年利だと二四%である。

支払いは秋の収穫物によって代物決済された。仕込親方は、農家が生産した大豆や小豆を函館へもって行って、より大きな仕込問屋や穀物仲買商の所で販売する。その代金から借金と手数料を差し引いて、残りが農家に渡される。出した大小豆がいくらで売られたものか知りようがなく、たとえ不正があっても、紙切れ一枚で納得せざるをえなかった。もちろんこの仕組みで、一時的に助けられた者もいようし、それを機に入植地に定着できた者もいただろう。しかし、おおかたは数年を出ずして、借金のために折角開墾した土地を手放し離農してしまった。幌別川や元浦川流域の初期入植者の子孫が、二、三割しか残っていないのはそういった理由にもよるのである。

こうした農家の窮状をみかねたのが長嶺将勝であった。彼はもともと百姓として浦河へ来たものではなかった。南部藩の武士の子として生まれ、新政府になってから、警察官として北海道に新しい天地を求め、浦河へ赴任。そののち、農家の惨状を救うと同時に、その将来性に着目して官を辞し、当初向別に、後に転じて絵笛に入植した。明治二十六年のことである。

彼が目にしたのは、冒頭で書いたように、一年の成果が百姓自身の手に入らなかったことだけでなく、冬の農閑期、サイコロ博打に明け暮れる百姓たちの現実だった。彼には骨の髄まで染み込んだ武士のモラル、百姓愛育の精神がみなぎっていたのかもしれない。しかも眼に一文字だにない百姓のあいだにあって、これを救済することは彼の責務に思えた。

たまたま入植と同時に絵笛の区長を拝命した彼は、十五、六戸しかなかった全村民に鶏を三、四羽飼わせることとした。この鶏が産む卵を集荷し、三日ほど貯めてから浦河の町へ持って行って売った。これまでの生活からみれば、村民にとっては予定外の現金収入であり、この売上代金を各戸に通帳を作って貯蓄させ、この金を現金を必要とする家に、年利二〇%で貸し付けた。今から考えれば随分高い金利だが、それでも当時の仕込屋や金貸しからみれば、五%以上も安いものだったという。各人へ配当を払ったあと、その一部を割いて集まりのときの茶菓子代とし、この残りをさらに原資に加えてその資金量を増やしていった。こうした相互扶助の無尽の会が絵笛愛心講であった。

明治三十三年、産業組合法が公布された。農協の祖型となる組織で、農民の相互扶助を広く育て、それに利用事業（機械設備、土地などの共同事業）、販売事業、購買事業などを加えたものである。長嶺将勝は法律の公布より四、五年後に愛心講を「絵笛産業組合」に組織変えし、谷口由三郎を組合長に据えた。ほかにやらねばならないことが山積していたからである。

愛心講の資金に加え、その後増えた入植者からも資金を集め、これを年二〇%で貸し付けた。そして年度末には組合員に出資額に応じて十五%の配当を支給した。当時産業組合の幹事を務めていた田

中由平が、息子岩蔵（昭和二年以降四十九年間、農協役員を務める）と交わした会話が、その頃の状況を如実に語っている。

「オヤジ、字も判らんのに帳面見て、判るのか」

「う〜む。オレは帳面見ても判らんわ……」

「だったら、ごまかしがあっても判らんべ」

「しかしなあ、オレの金が今いくら組合に行ってるかは判つとる。それにちゃんと一割五分の配当が来とれば、やっぱり間違いはないと思うんじゃ」

明治四十年代後半になって、向別村も産業組合を作り絵笛と合併する。名は依然として絵笛産業組合である。その後も組合員は着実に増加し資金量も増えたが、谷口由三郎の自宅内の事務所だけはそのままだった。

このため、移転の話がもちあがり“ではいっそのこと、浦河へ進出しようじゃないか”ということになり、現在の昌平町、沢鉄工場の浜側のところに移転した。ここでは、これまでの信用事業に加え、資材や物資を扱う購買、生産物の大豆、小豆、米、馬鈴薯、稗などの販売の事業もあらたに加えられた。昭和の初めの頃の話である。

しかしこの場所は、のちに線路用地として鉄道省に買収され、やむを得ず現在の築地の江谷（ごうや）自転車店のあたりへ移転する。

この頃になって、すでに活動を続けていた杵臼産業組合と絵笛産業組合とを合併させようという動きが、ホクレン（保証責任北海道信用購売販売組合联合会）の手で進められていた。絵笛としては資金量もあり、その必要も感じなかったのだが、ホクレンは国の強い後押しをバックにして強引に合併を迫った。絵笛側は「ではいったん、すべてを清算して、改めて出資に応じる」ということで妥協案を出そうとするが、その協議の場にさえ介入してきてホクレンが口を出す。結局これに押し切られ両者の合併が成立する。浦河産業組合の設立であった。

当初こそ組合は絵笛が始まりということもあって、初代の組合長には森垣、副組合長に杵臼の佐々木が選ばれるが、翌年には森垣が組合長を下りて佐々木が就任し、その翌年に浦河産業組合は浦河農業会と改称され、太平洋戦争遂行のための組織に変貌した。組織は単なる配給物資や生産物の受け渡し機関に墮し、この状態が終戦後まで続けられた。本来の農協運動に立ち戻るのは昭和二十四年以降のことだった。

[文責 高田]

#### 【話者】

田中 岩蔵      浦河町絵笛      明治二十九年生まれ